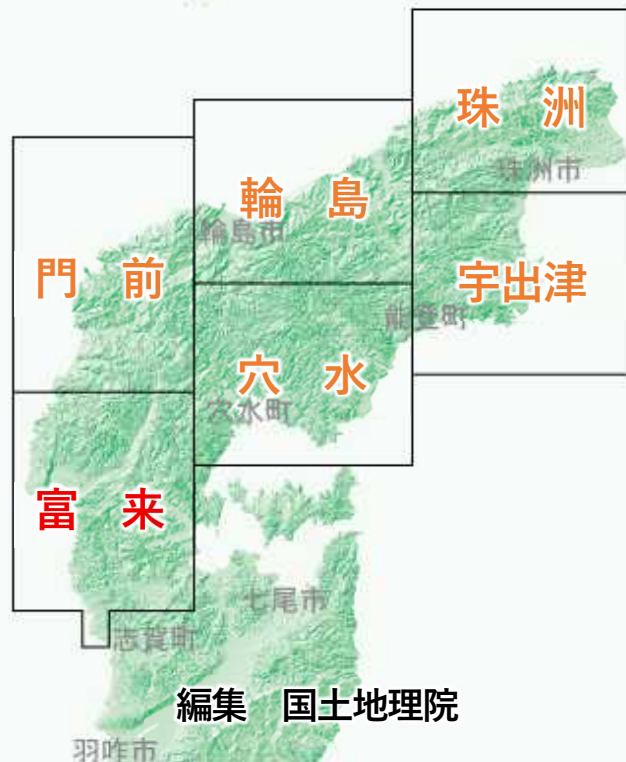


1:25,000活断層図 能登半島北部の活断層

「富来」解説書

鈴木 康弘⁽¹⁾・後藤 秀昭⁽²⁾・
松多 信尚⁽³⁾・渡辺 満久⁽⁴⁾

令和7年12月

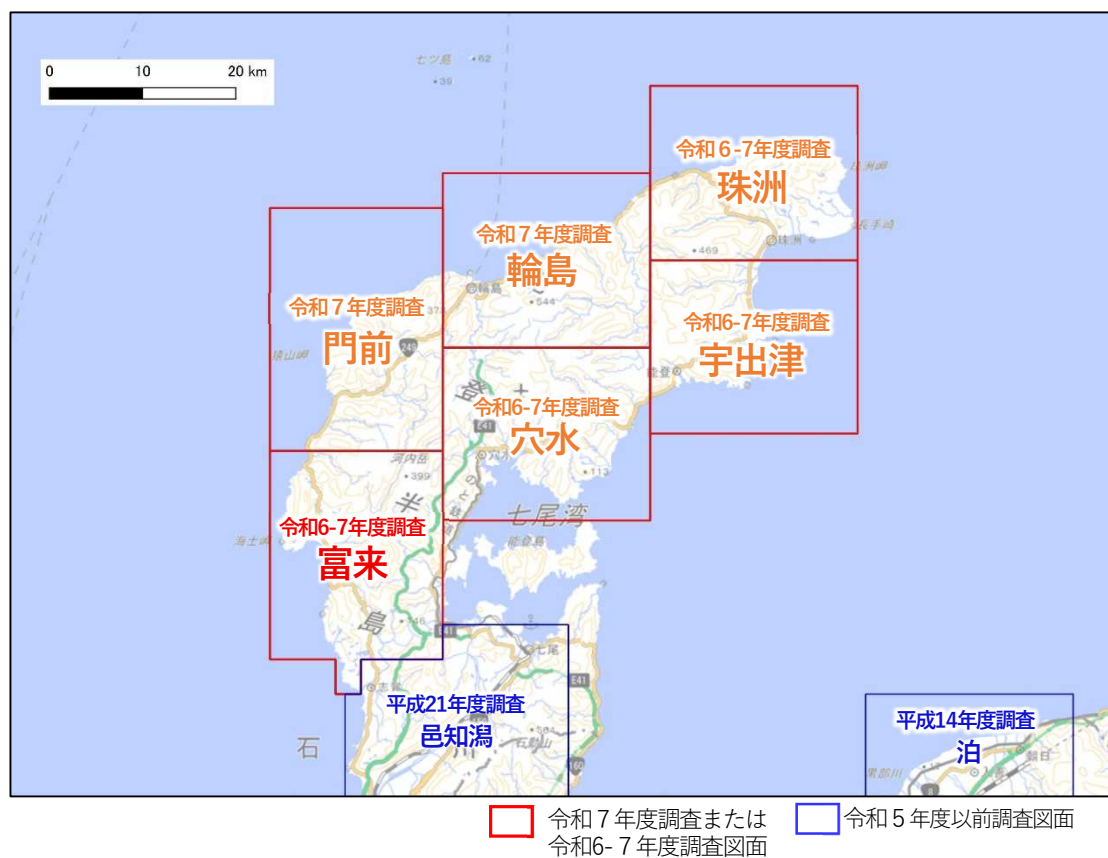


(1) 名古屋大学, (2) 広島大学, (3) 岡山大学, (4) 東洋大学

目 次

能登半島北部の活断層「富来」解説書

1. 富来断層	3
2. 貝田断層	11
3. 酒見断層	12
4. 西海断層	13
5. 福浦断層	14
6. 風吹岳南方の断層	16
7. 田尻滝西方の断層	16
8. 広地川周辺の断層	17
9. 七尾市中島町古江付近から外原に至る断層	17
10. 七尾市中島町宮前付近の断層	17
11. 遍照岳付近の断層	18
12. 志賀町荒屋付近から牛ヶ首付近に至る断層	18
13. 志賀町小浦付近の断層	19
14. 志賀町福浦港付近から赤住に至る断層	19
15. 谷内西方の断層	25
16. 高爪山西方の断層	26
17. 輪島市門前町飯川谷から馬渡に至る断層	26
引用文献	27
調査に使用した諸資料及び検討委員会等	28
付図（断層索引図）	30



1:25,000 活断層図「富来」作成位置図

1:25,000 活断層図 能登半島北部の活断層「富来」解説書

1:25,000 活断層図「富来」（以下「本図」という。）には、^{とぎ}富来断層、^{かいだ}貝田断層、^{さかみ}酒見断層、^{さいかい}西海断層、^{ふくら}福浦断層と、その他推定活断層が記載されている。以下に、各断層の概要と判読した根拠を記載する。（下記の断層ごとの番号及び記号は、巻末の付図（断層索引図）に記載した番号及び記号に対応）。

1. ^{とぎ}富来断層

- ・ 走向 : 北北東－西南西
- ・ 長さ : 約 14 km 以上（海域に至る）
- ・ 断層種別 : 活断層（縦ずれが主体、一部活撓曲・右横ずれを含む）、推定活断層、地震断層

（1）概要

^{こえと}富来断層は、^{とぎりょうけまち}穴水町越渡付近から志賀町富来領家町付近の富来川河口まで連続し、海域へも連続することが推定される長さ 14km 以上の活断層である。走向は中央部付近を境に変化し、西部（1a と 1b：図 1）は東北東－西南西、東部（1c と 1d：図 2）は北北東－南南西走向である。西部は従来の富来川南岸断層、東部の一部（1d の北半分）は富来川断層にほぼ相当する（活断層研究会 1991）。そこではいずれも確実度Ⅱ（活断層であると推定されるもの）とされていたが、今回の調査において確実な変位地形が確認された。本調査で新たに活断層が確認された 1c 区間は、大規模な地すべり地域を横断しているが、その地すべり土塊を変位させる活断層として存在する。1b と 1c は近接・雁行の関係にあるため一連の活断層であると判断し、日本活断層学会(2024)の指針に基づき、全体を富来断層と命名した。なおこの名称は、能登半島全域の地形の高度分布の特徴から田辺（1940）が認定したものに由来する。

（2）判読根拠

本断層の主な地点ごとの判断根拠は次の通りである。

- 1a： この区間（延長約3km）では、下位段丘面や扇状地面に撓曲変形が認められる。既存研究では、太田ほか（1976）が能登半島全域の海成段丘面の高度分布を検討した際、旧汀線高度の不連続から本区間で南上がりの活断層の存在を推定した。その後この地域の海成段丘面の対比・編年を確かにした渡辺ほか（2015）において、富来川を挟んだ南北で MIS5e の段丘面（中位段丘面）高度が20m 程度からは50m 程度へ急激に変化することを根拠として、同区間に南上がりの活断層の存在を認定し

た。北陸電力(2021)は、ボーリング調査と反射法地震探査により南東傾斜約45度の断層面を確認している。

2024年能登半島地震時には地震断層が出現し、南側が数十センチ隆起し、数十センチの左横ずれも生じた。断層直上および近傍では甚大な建物被害も生じた。その概要は以下のとおり（鈴木・渡辺 2024a, b）。

断層の隆起側にあたる領家漁港南の海岸は30cm 程度隆起し（写真1a），富来川に架かる国道249号線の橋の路面は南側が持ち上がった。富来地頭町市街地には地震断層が現れ、甚大な建物被害が生じた（写真1b）。さらに東部（1a 区間中央部付近）では連続的に左横ずれを伴う亀裂が続いた（写真1c, d）。大坂山トンネルから北へ続く道路面には顕著な地震断層による南側隆起が生じ（写真1e），さらにその東方では南方隆起のため水田の南半分が干上がった（写真1f）。地震直後の速報地点（鈴木・渡辺 2024a）のみを観察した吉見・丸山(2024)は、盛土の影響によって解釈して地震断層であることへ疑問を呈したが、同様の地変が確認される約3km の範囲がすべて盛土というわけではないため、揺れに伴う地盤変状だけでは説明できない。ただしこの断層面上では顕著な余震活動は報告されておらず、変位量も断層の長さに比して小さい。また、左横ずれは変位地形の特徴とは合致しないため富来断層の固有な活動とは異なる、2024年能登半島地震による誘発的活動である可能性が高い。

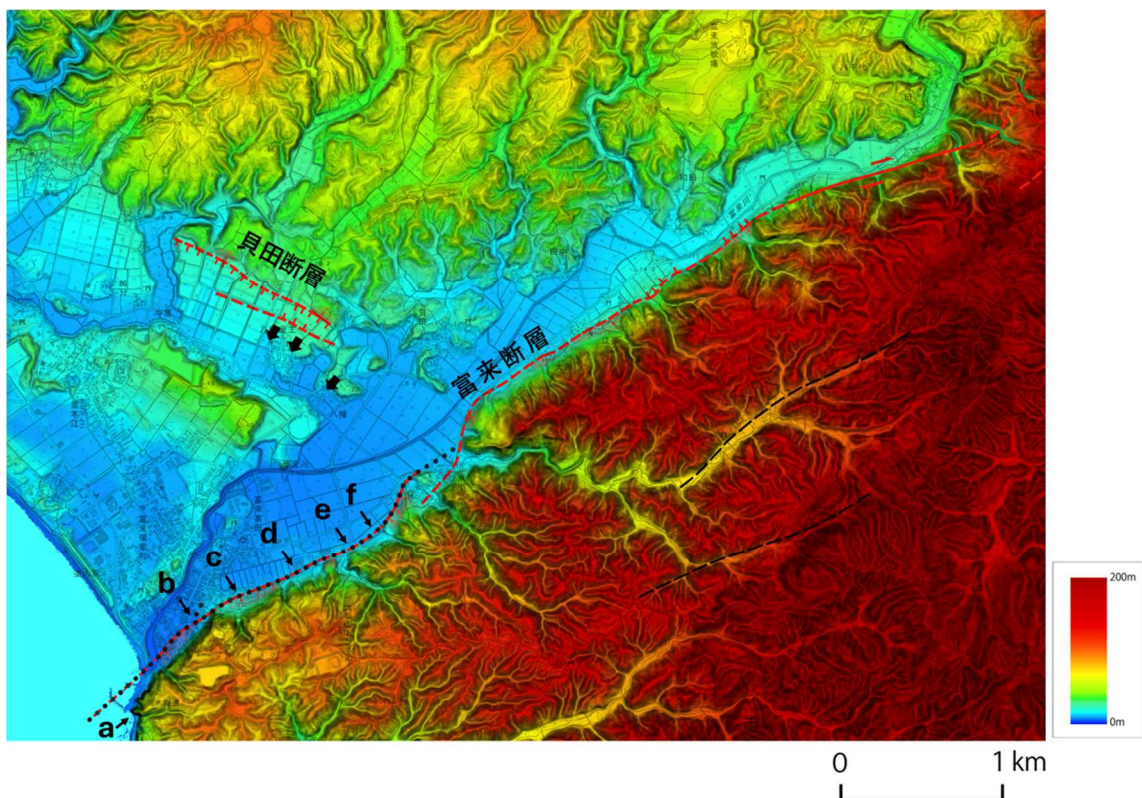


図1：富来断層西部（1a, 1b）のトレースと周辺の地形

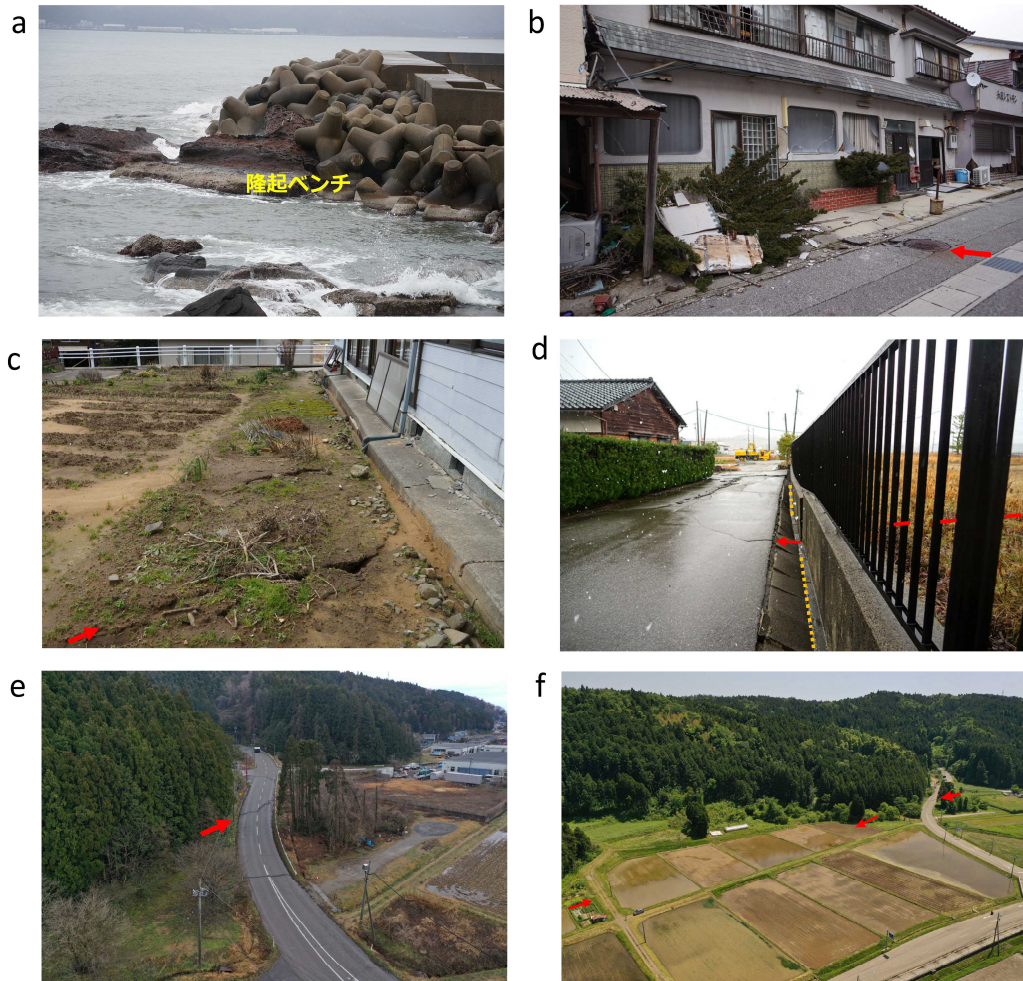


写真1 富来断層に沿う2024年能登半島地震に伴う地震断層（鈴木・渡辺, 2024b）
（位置は図1に示す）

1b： この区間（約4km）の範囲においても下位段丘や扇状地面に撓曲変形と低断層崖が認められる。また谷の右ずれ屈曲が確認される。2024年能登半島地震時の地震断層は報告されていないが、断層に沿う地域の建物被害は大きかった。東部においては明瞭な谷の右横ずれが確認される。

1c： この区間（約3km）は大規模な地すべり地域であるが、地すべり土塊の中に北北東－南南西方向に直線的に延びる東上がりの崖がある。その特徴的な分布を規定する原因を地すべりで説明することは難しい。この区間の北端部においては地すべり土塊の範囲を越えても崖が続くため、活断層変位地形であると判断される。なお、本区間は本調査で新たに活断層が確認された区間である。

この区間の南端付近において、2024年能登半島地震の際の地震断層が確認される。山間部に位置し、十分な踏査は行われていないが、道路を横切る地点で左横ずれ40cmを伴う亀裂が確認され、その亀裂の山地内への連続も確認された（写真2，3）。

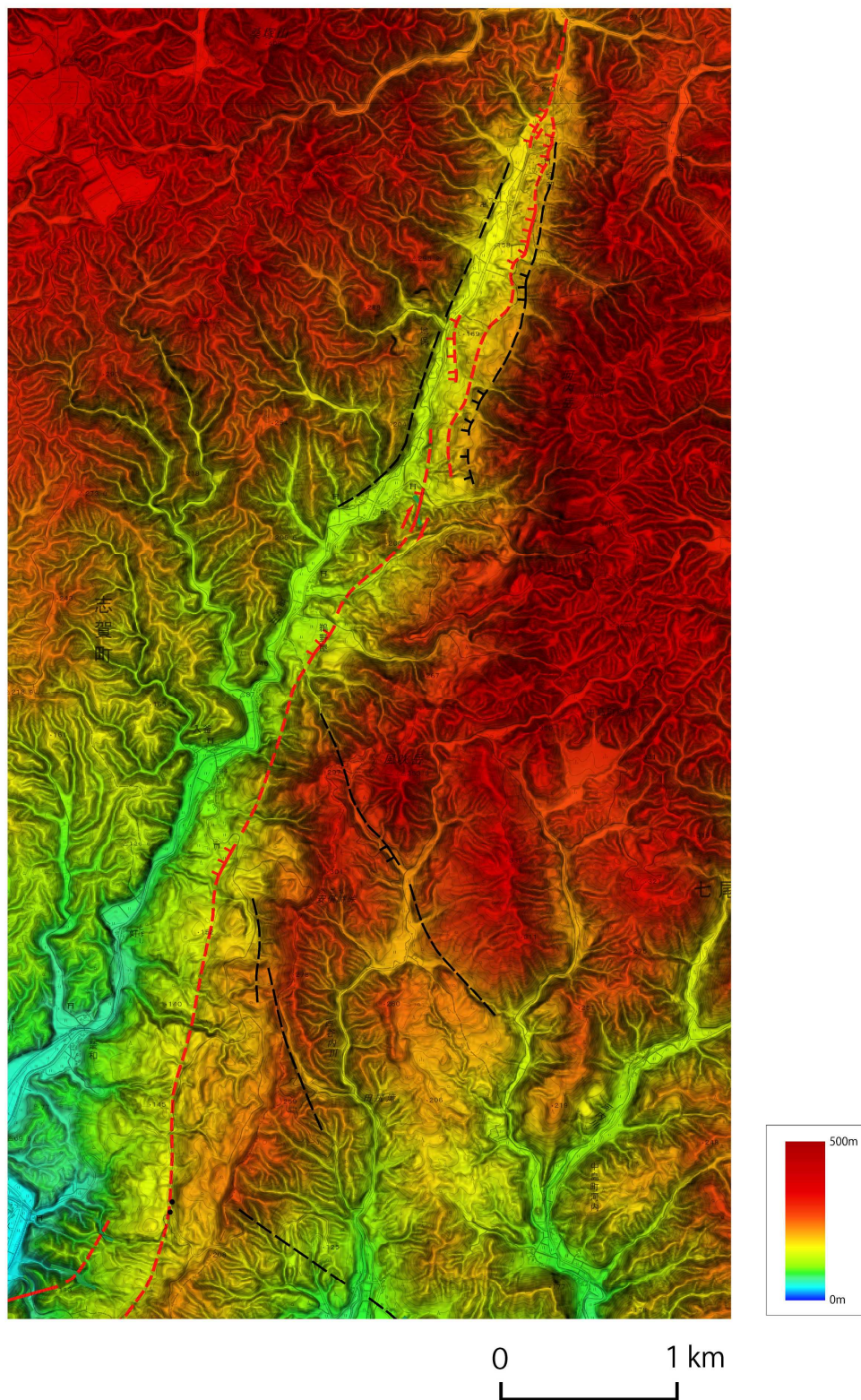


図2：富来断層東部（1c, 1d）のトレースと周辺の地形



写真2：道路面に確認される左ずれを伴う地震断層（2024年11月10日撮影）



写真3：道路面に確認される地震断層周辺の地形（2024年11月10日撮影）

1d： この区間（約5.5km）においては、扇状地や段丘面を切る東上がりの低断層崖が確認される。中央部の約1kmの範囲には地すべりが分布するため、断層変位地形を確実に認定することは難しい。しかしながら個々の地すべりブロックの範囲を越えて崖が南北方向に連続することから、活断層が連続すると判断される。本区間南部は今回の調査で新たに活断層が確認された区間である。既存研究（太田ほか

1976)は本区間北部に活断層が存在する可能性を示唆し、富来川断層と命名した。活断層研究会(1980)は、ほぼ同じ位置に確実度Ⅱ(活断層であると推定されるもの)の断層を表示している。これらは、主に東の山麓線に注目しており、これも活断層の可能性が高いものの、トレース上に新期の地形面が分布しないことから確実な断層変位地形は見出されていない。

図3, 4に国土地理院が1963年に撮影した空中写真(MCB639X)を用いて作成した写真測量による地形断面図とその測線位置を示す。活断層であることを確実に示す根拠は最北端の地形断面1, 2付近にある。ここには東方から流下する富来川支流が形成した完新世の地形面(扇状地又は沖積低地)上に、東上がり1~2mの低崖がある。この崖は北北東-南南西方向に延び、北端において支流が形成した浸食崖とクロスしてさらに北方へ続く(図5, 図6)。そのため、この低崖は断層崖であることは確実である。地形断面図中には地形面分類をL(低地段丘面), LL(沖積低地)として示す。LL面の上下変位は1~2m, L面2~6m程度である。断層が複数並走する場合には足し合わせる必要がある。

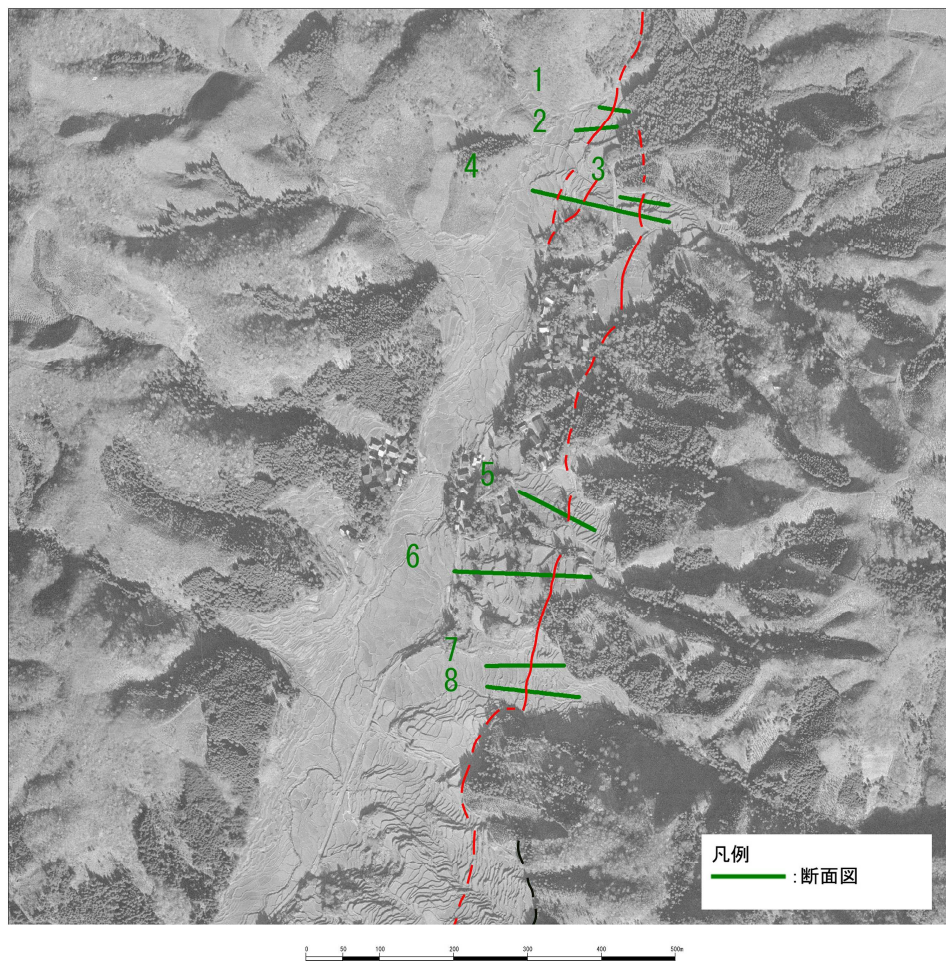


図3：富来断層北部トレース1dにおける写真測量断面測線位置図(鈴木未公表資料)

縮尺の違い等により、活断層トレースの表現が図面と同じでない。

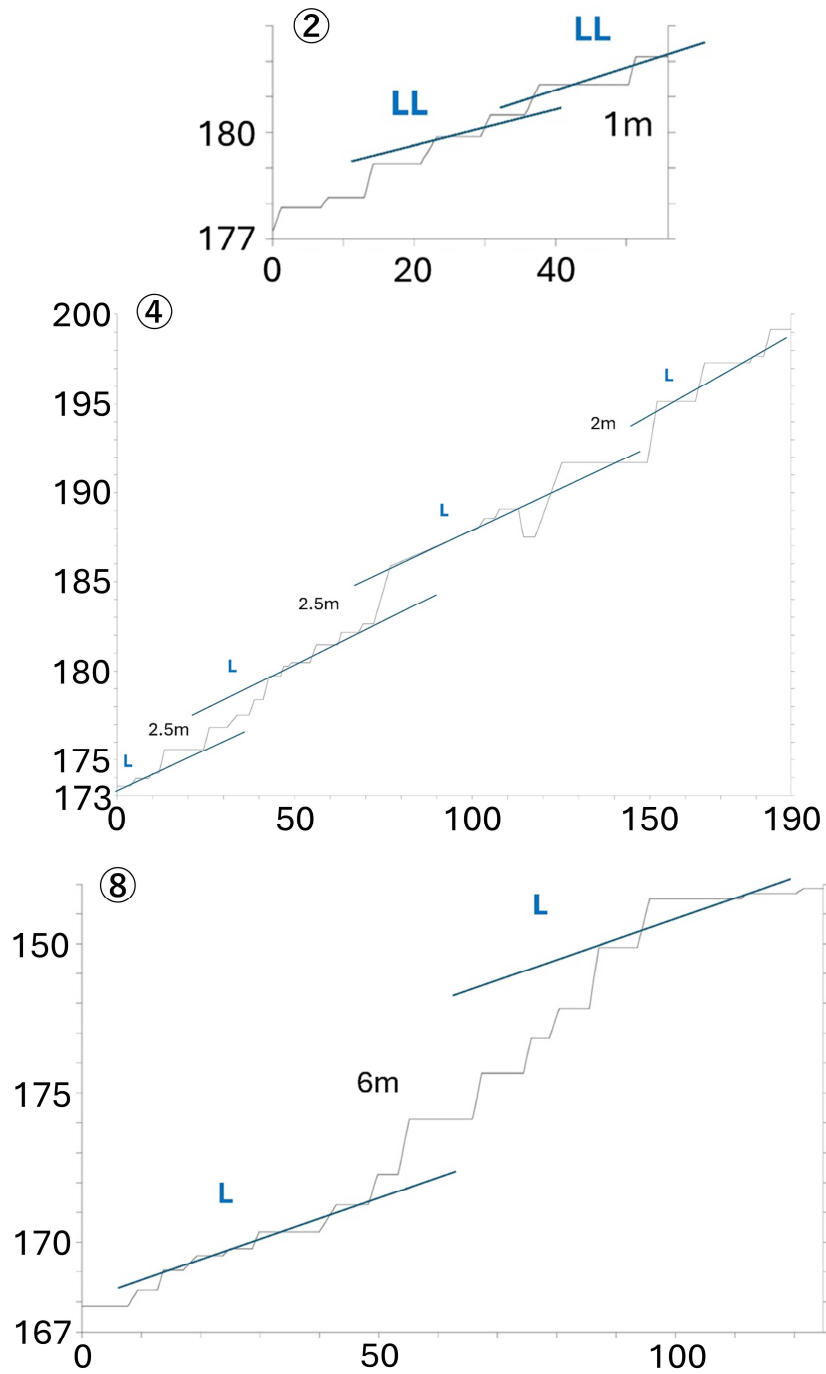


図4：富来川断層北部トレース 1d における写真測量地形断面（鈴木未公表資料から抜粋）

縦軸：標高(m)，横軸：水平距離(m)，垂直倍率 5 倍

なお、富来川河谷の西縁は極めて直線的で西側の山地を下刻する小規模河川の出口の一部で落差を伴っており、西側隆起の活断層が存在する可能性があることから、推定活断層を認定している。

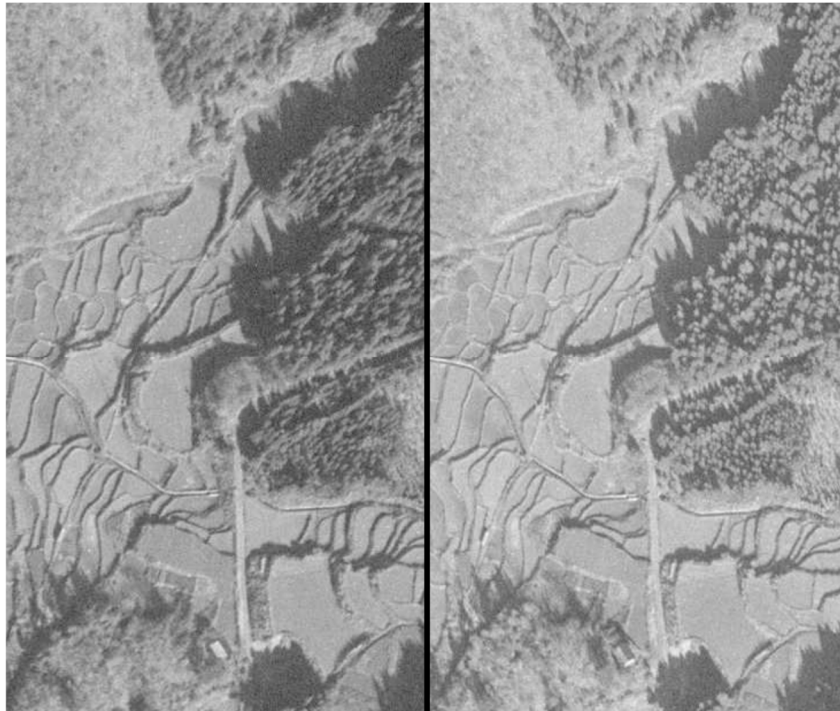


図5 富来断層最北部のステレオ画像 (MCB639X C2-7, 8)

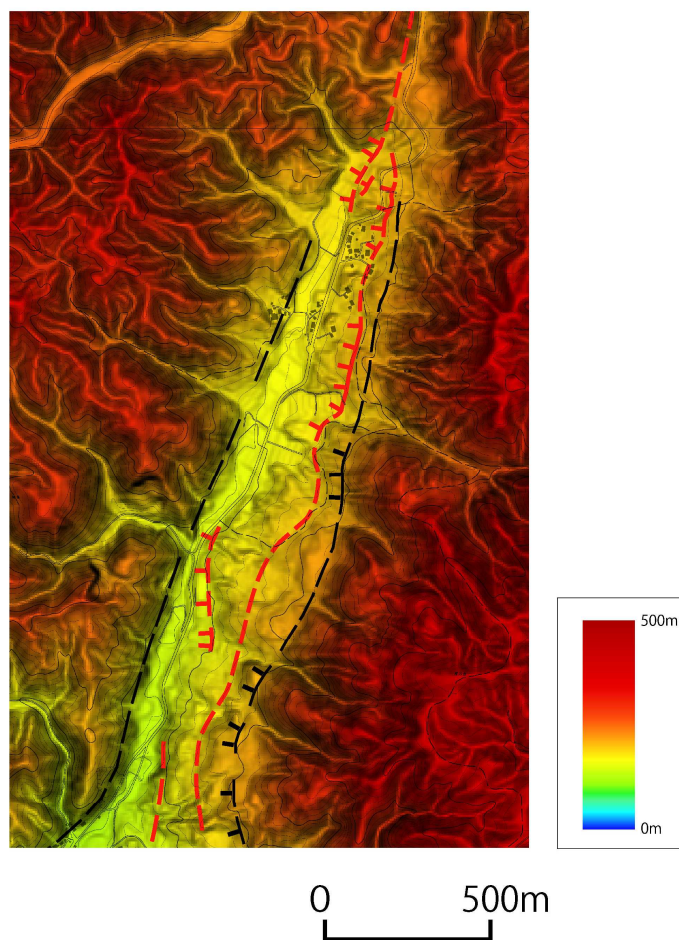


図6 富来断層最北部の地形

2. 貝田断層^{かいだ}

- ・ 走向 : 西北西－東南東
- ・ 長さ : 約 1 km
- ・ 断層種別 : 活断層（縦ずれが主体、一部活撓曲を含む）

（1）概要

貝田断層は、志賀町八幡座主^{やわたぎす}周辺に、西北西－東南東方向に延びる長さ約 1 km の活断層で、縦ずれ変位や撓曲変形を伴う。本断層は今回の調査で新たに確認された活断層である。

（2）判読根拠

本断層の判断根拠は次の通りである。

上位段丘と中位段丘を境する東南東－西北西走向の直線的な崖付近で上位段丘面が南南西方向に撓曲変形している（写真 4 中黄色矢印）。さらに、この崖と並走して中位段丘を逆向き（南上がり）に変位させる直線的な崖が存在し、2 つの断層に区切られた地溝が認められる。また南側の断層線より南方に位置する中位段丘面は、さらに南へ傾動している。現在は圃場整備が進み、この地形は明瞭には残っていないが、1960 年代の航空写真（MCB639X）により確認できる。



写真 4 貝田断層の北北東上がりの撓曲崖（南東を望む、遠方に富来断層）

（2024 年 11 月 10 日撮影）

3. 酒見断層^{さかみ}

- ・走向 : 北北東－南南西
- ・長さ : 約 6 km
- ・断層種別 : 活断層（縦ずれを主体とし，一部右横ずれを含む），推定活断層

（１）概要

酒見断層は、志賀町大福寺付近^{だいふくじ}から志賀町西海風無付近^{さいかいかざなし}まで、北北東－南南西方向に延びる長さ約 6 km の活断層であり推定活断層を含む。

（２）判読根拠

本断層の判断根拠は次の通りである。

3a： 太田ほか(1976)は、上位段丘面高度の不連続を根拠に酒見断層を認定した。第四紀後期の活動を示す高度差は必ずしも明瞭ではないが、中位段丘面（本図内では、範囲の狭いものは省略）と丘陵の境界線付近において複数の右屈曲の河谷の存在が確認される。

3b： 上位段丘面が南東側へ撓曲変形している可能性が高い。その様子は図 7 の西海風^ふ戸^と付近に明瞭に現れている。海成段丘面形成時期の海底地形の現れである可能性を完全には否定できないが、撓曲状の特徴的な地形が確認される。この面を小規模に開析する谷底も同様に変形している可能性がある。ここでは推定活断層と表記した。

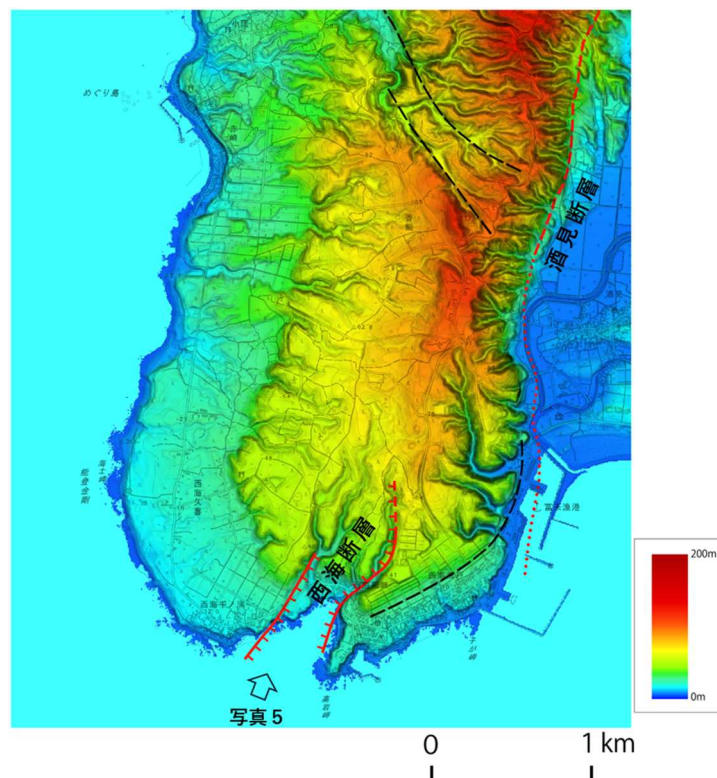


図 7：酒見断層・西海断層のトレースと周辺の地形

4. ^{さいかい}西海断層

- ・走向 : 北北東－南南西
- ・長さ : 約 1 km 以上（海域へ連続する可能性がある）
- ・断層種別 : 活断層（縦ずれが主体）

（1）概要

西海断層は、志賀町西海風無周辺に、北北東－南南西方向に延びる長さ約 1 km の活断層で、活断層は二条あり、全体として地溝状を呈している。本断層は今回の調査で新たに確認された活断層である。

（2）判読根拠

本断層の判断根拠は次の通りである。

- 4a: 中位段丘面が西上がりに隆起し、海岸部の露頭で高角の断層面が確認される（写真 5, 6）。浅海域へも連続することが空中写真でも確認できる。
- 4b: 上位段丘面および中位段丘面に東側上がりの断層崖が確認される。下位段丘面（面積がわずかであるため本図には記載していない）の高度分布にも表れているため活断層として認定される。



写真 5 西海断層の変位により形成された直線的な海岸線と周辺地形（北東を望む）

（2024 年 11 月 10 日撮影）



写真6 西海断層の変位により形成された直線的な海岸線（西を望む）
(2024年11月10日撮影)

5. 福浦断層

- ・走向 : 北西－南東
- ・長さ : 約7 km
- ・断層種別 : 活断層（縦ずれが主体）、推定活断層

(1) 概要

福浦断層は、志賀町福浦港付近から志賀町牛ヶ首の猪之谷^{いのだに}貯水池付近まで、北西－南東方向に延びる長さ約7 kmの活断層であり推定活断層を含む。

(2) 判読根拠

本断層の判断根拠は次の通りである。

丘陵域内に明瞭な鞍部地形や直線的な谷が連続し、これを挟んで上位段丘面に明瞭な西上がりの高度差が確認される（図8）。第四紀後期の活動を決定づける確実な地形的証拠は見出されないが、北陸電力(2021)などは、このトレース周辺において断層露頭を確認している。さらに南部においては、比較的明瞭な鞍部の連続やリニアメントが続き、一部のトレースにおいては右屈曲の谷が数多く確認され活断層である可能性を示唆する。ここでは推定活断層として表記する。

その他、推定活断層として、風吹岳^{かざふきだけ}南方の断層、田尻滝^{たじりだき}西方の断層、広地川^{ひろちがわ}周辺の断層、七尾市中島町^{なかにしまちふるえ}古江付近から外原^{そどはら}付近に至る断層、七尾市中島町^{なかにしまちみやのまえ}宮前付近の断層、遍照岳^{へんしょうだけ}付近の断層、志賀町^{あはや}荒屋付近から牛ヶ首^{うしがくび}付近に至る断層、志賀町^{おうら}小浦付近の断層、志賀町^{しかまちふくらこう}福浦港から赤住^{あかすみ}付近に至る断層、谷内^{やない}西方の断層、高爪山^{たかつめやま}西方の断層、輪島市^{もんぜんまち}門前町飯川谷から馬渡^{まわたり}に至る断層が記載されている。

6. 風吹岳^{かざふきだけ}南方の断層

- ・走向 : 北北西－南南東
- ・長さ : 約 2 km
- ・断層種別 : 推定活断層

(1) 概要

風吹岳^{うのや}南方の断層は、志賀町^{うのや}鶴野屋付近から風吹岳の南方に至る、北北西－南南東方向に延びる長さ約 2 km の推定活断層である。

(2) 判読根拠

明瞭な鞍部地形が連続する。中央部付近には低断層崖の可能性のある地形も確認されるが、トレース上に新期の地形面がほとんど存在しないことから地形学的には確実に活断層であると認定することはできない。

7. 田尻滝^{たじりだき}西方の断層

- ・走向 : 北北西－南南東、北西－南東
- ・長さ : 約 3 km
- ・断層種別 : 推定活断層

(1) 概要

田尻滝^{あごぜ}西方の断層は、七尾市と志賀町の境にある安俱峙^{あごぜ}峠西方から七尾市中島町^{にしやち}西谷内付近に位置し、北北西－南南東方向と北西－南東方向に延びる 2 条のトレースで構成される長さ約 3 km の推定活断層である。

(2) 判読根拠

明瞭な鞍部地形が連続し、左ずれを示している可能性のある谷の屈曲も見られる。しかしながらトレース上の地形面に明瞭な変位を確認することはできないため、推定活断層とした。

8. 広地川^{ひろちがわ}周辺の断層

- ・ 走向 : 東北東－西南西
- ・ 長さ : 約2 km
- ・ 断層種別 : 推定活断層

(1) 概要

広地川^{ひろち}周辺の断層は、志賀町^{ひろち}広地^{ひろち}周辺で、東北東－西南西に延びる2条のトレースで構成される長さ約2 kmの推定活断層である。

(2) 判読根拠

極めて明瞭な直線状の河谷が連続するが、トレース上に新期の地形面がほとんど存在しないことから地形学的には確実に活断層であると認定することはできない。

9. 七尾市中島町^{ふるえ}古江付^{そどはら}近から外原付^{そどはら}近に至る断層

- ・ 走向 : 北北東－南南西
- ・ 長さ : 約5 km
- ・ 断層種別 : 推定活断層

(1) 概要

七尾市中島町^{ふるえ}古江付^{そどはら}近から中島町外原付^{そどはら}近に至る断層は、七尾市中島町^{ふるえ}古江付^{そどはら}近から同市中島町外原付^{そどはら}近に至る、北北東－南南西方向に延びる長さ約5 kmの推定活断層である。

(2) 判読根拠

南部において明瞭な鞍部地形が連続する。北部においてはこのトレースを境に西側の標高が相対的に高い。下位段丘面に落差をもたらしている可能性が否定できないが、並行する西谷地川による河食崖の可能性も排除できず、変動崖と断定できないため推定活断層とした。

10. 七尾市中島町^{なかじま}宮^{みや}前^{まへ}付^{まえ}近の断層

- ・ 走向 : 北東－南西
- ・ 長さ : 約4 km
- ・ 断層種別 : 推定活断層

(1) 概要

七尾市中島町宮前付近の断層は、七尾市中島町小牧^{おまき}ののと里山海道付近から中島町宮前付近をとり中島町山戸^{やまとだ}田付近まで、北東－南西方向に延びる長さ約4kmで2条のトレースで構成される推定活断層である。

(2) 判読根拠

このトレースを境に北西側の標高が相対的に高い。東側のトレースでは、中央部付近の中位段丘面に変位を与えている可能性がある。また、西側のトレースには複数の河川に右屈曲があり、断層変位による可能性がある。推定活断層とするが、活断層の可能性は比較的高い。

11. 遍照^{へんしょうだけ}岳付近の断層

- ・走向 : 北西－南東
- ・長さ : 約5km
- ・断層種別 : 推定活断層

(1) 概要

遍照^{へんしょうだけ}岳付近の断層は、志賀町豊後名^{ぶんごめ}付近から同町代田^{しなんた}付近まで、北西－南東方向に延びる推定活断層である。本図には複数のトレースで構成される長さ約5kmの区間が記載されている。

(2) 判読根拠

明瞭な鞍部列が連続し、上位段丘面に高度差をもたらしている。中位段丘面以下の地形面において明瞭な変位が確認できないため推定活断層と表記する。

12. 志賀町荒屋^{あらや}付近から牛ヶ首^{うしがくび}付近に至る断層

- ・走向 : 北北西－南南東
- ・長さ : 約6km
- ・断層種別 : 推定活断層

(1) 概要

志賀町荒屋付近から牛ヶ首付近に至る断層は、志賀町荒屋付近から同町牛ヶ首付近まで、北北西－南南東に延びる長さ約6kmの推定活断層である。

(2) 判読根拠

このトレースを境に西側の丘陵高度が相対的に高い。北部では直線的な河谷の西岸において沖積低地と中位（下位）段丘面を境する崖が連続し、変動崖の可能性があるが、並行する米町川こんまちがわによる河食崖である可能性を排除できず、確実な断層変位地形と認定することはできない。中央部付近においては、東へ流下する谷底面に比高数メートルの落差がある可能性がある。南部においては西側の上位段丘面が東方へ傾動する。南端付近には下位段丘と沖積低地に直線的な崖が存在する。

1 3. 志賀町小浦おうら付近の断層

- ・ 走向 : 北北西－南南東
- ・ 長さ : 約 2 km
- ・ 断層種別 : 推定活断層

(1) 概要

志賀町小浦付近の断層は、志賀町百浦ももうら付近から大津おおづ付近まで、北北西－南南東に延びる長さ約 2 km の推定活断層である。

(2) 判読根拠

上位段丘面に西側隆起が認められる。また、その西側の中位段丘面には緩やかな起伏があり、地殻変動による可能性が高い。ただし戦後の比較的早い段階で原地形が人工改変を受けており、地形改変前に撮影された航空写真が存在しないため、地形調査を行うことが難しい。ここでは推定活断層として表記した。

1 4. 志賀町福浦港ふくらこう付近から赤住あかすみに至る断層

- ・ 走向 : 北北西－南南東
- ・ 長さ : 約 3 km 以上（南北とも海域へ至る）
- ・ 断層種別 : 推定活断層

(1) 概要

志賀町福浦港付近から赤住に至る断層は、北北西－南南東に延びる東上がりの長さ 3 km 以上の推定活断層である。南北とも海域に至る。

(2) 判読根拠

本断層の判断根拠は次の通りである。

この地域に分布する中位段丘面は、既存研究（太田・平川 1979、渡辺ほか 2015 など）により MIS5e に形成されたとされている。この段丘面が撓曲を伴って東上がりに 2～3m 程度隆起している可能性が高い。

図 9～12 に、1963 年国土地理院撮影の 2 万分の 1 航空写真（MCB639X）を用いた写真測量によって作成した地形断面図とその測線位置を示す。地形面分布を詳細に観察すると、海成段丘面として形成された中位段丘面（M1 面）と、これをわずかに下刻した河成面（M1' 面：本図では沖積低地として記載）があり、これらに東上がりの落差が確認される。その比高は M1 面上で 2～3m であるのに対して、より新しい M1' 面上では 1.5m 程度であり、変位の累積の可能性が高い。

MIS5e 相当の海成段丘面が二面の海成面から構成される例は少ない。また落差をもたらす崖の形状は上端が丸みを帯び、撓曲崖の形状を示す。もしも二面に分かれる理由を、MIS5e の時期に局所的な隆起が生じて浸食基準面（海水面高度）が相対的に低下したためと仮定すると、二面のうち低い方の面の上端高度（崖の基部の標高）は一定でなければならないが、実際には 10～20m と大きくばらつくため矛盾する。なお、もしそれでもこの仮説を採る場合、崖の基部の標高を 15m として試算すると、MIS5e の旧汀線高度が 22m であることから、比較的短期間に $22-15=7\text{m}$ の隆起が起きてたことになり、それも考えにくい。

ところで、現地調査により、陸上で確認される断層線の最北端部の離水ベンチ上海岸部で断層露頭が確認された。断層トレースは数条に分かれ、全体的に断層破碎部は差別浸食が進み、風化のため保存状態が良好ではない（写真 7・8）。最も陸寄りのトレースは低断層崖に連続する可能性が高く、部分的に軟らかい粘土を挟在させる。

以上のことから、本断層は変動地形学的には活断層であると判断することが妥当と考えられるが、本断層の一部がかかる志賀原子力発電所の敷地内において、原子力規制委員会による新規制基準適合性に係る審査において詳細な地質調査が行われるなかで、現時点では断層の存在を示唆するもしくは否定する地質データが確認できなかったため、本図においては推定活断層の表記とした。

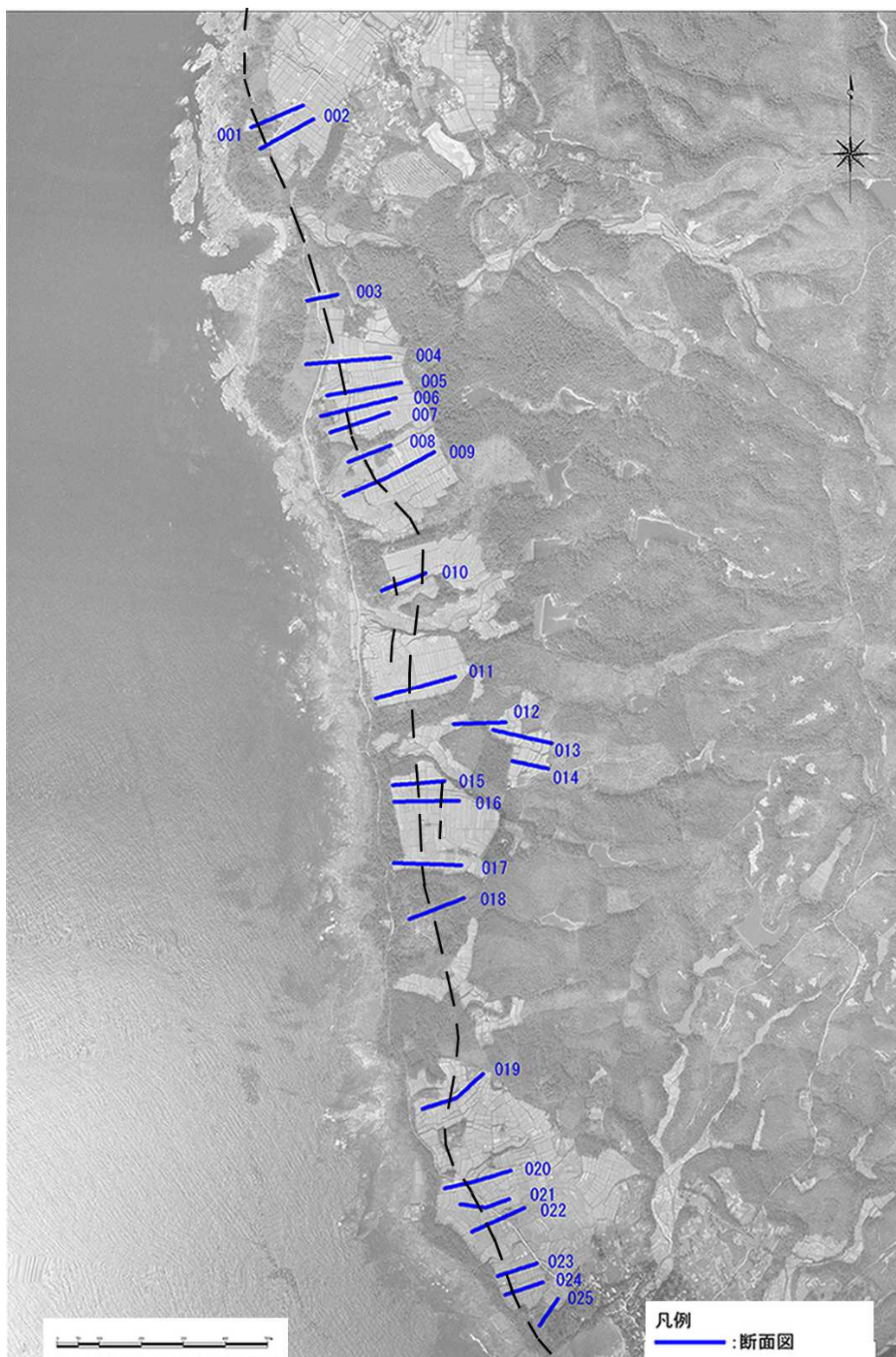


図9 志賀町福浦港付近から赤住に至る断層に沿う地形断面測線位置図（鈴木未公表資料）

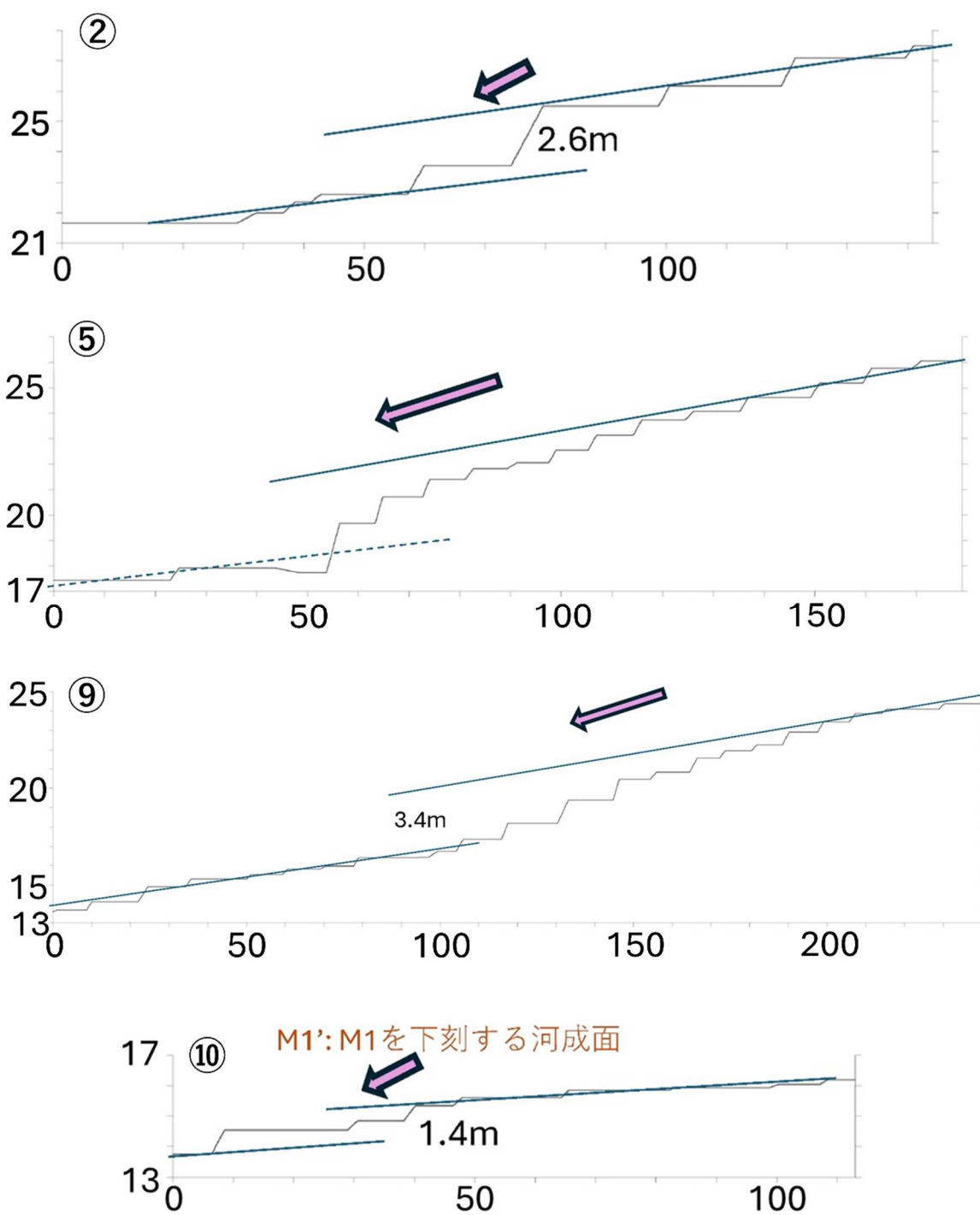


図 10 志賀町福浦港付近から赤住に至る断層に沿う地形断面図①（鈴木未公表資料から抜粋）
縦軸：標高(m)，横軸：水平距離(m)，垂直倍率 5 倍

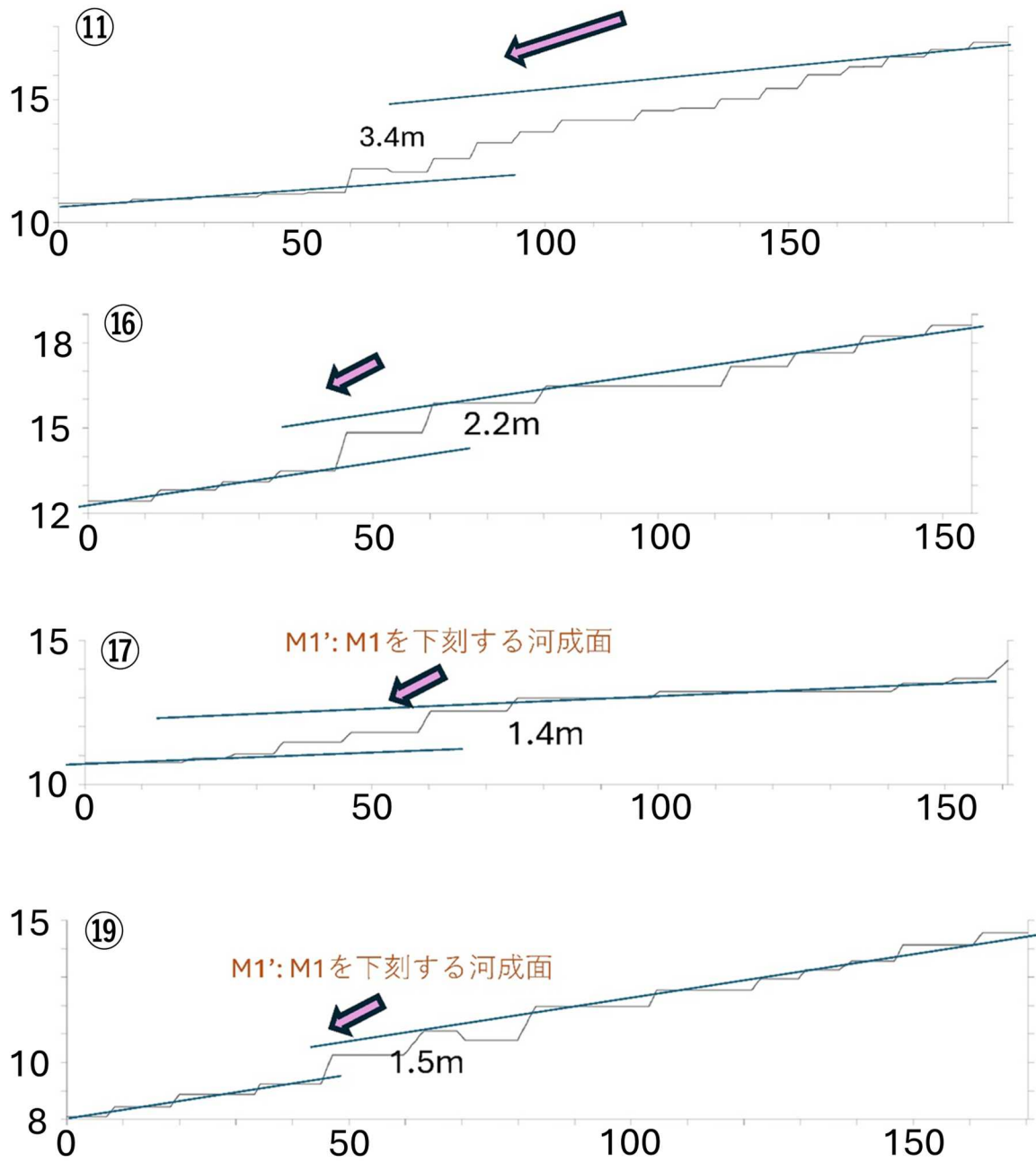


図 11 志賀町福浦港付近から赤住に至る断層に沿う地形断面図②（鈴木未公表資料から抜粋）
縦軸：標高(m)，横軸：水平距離(m)，垂直倍率 5 倍

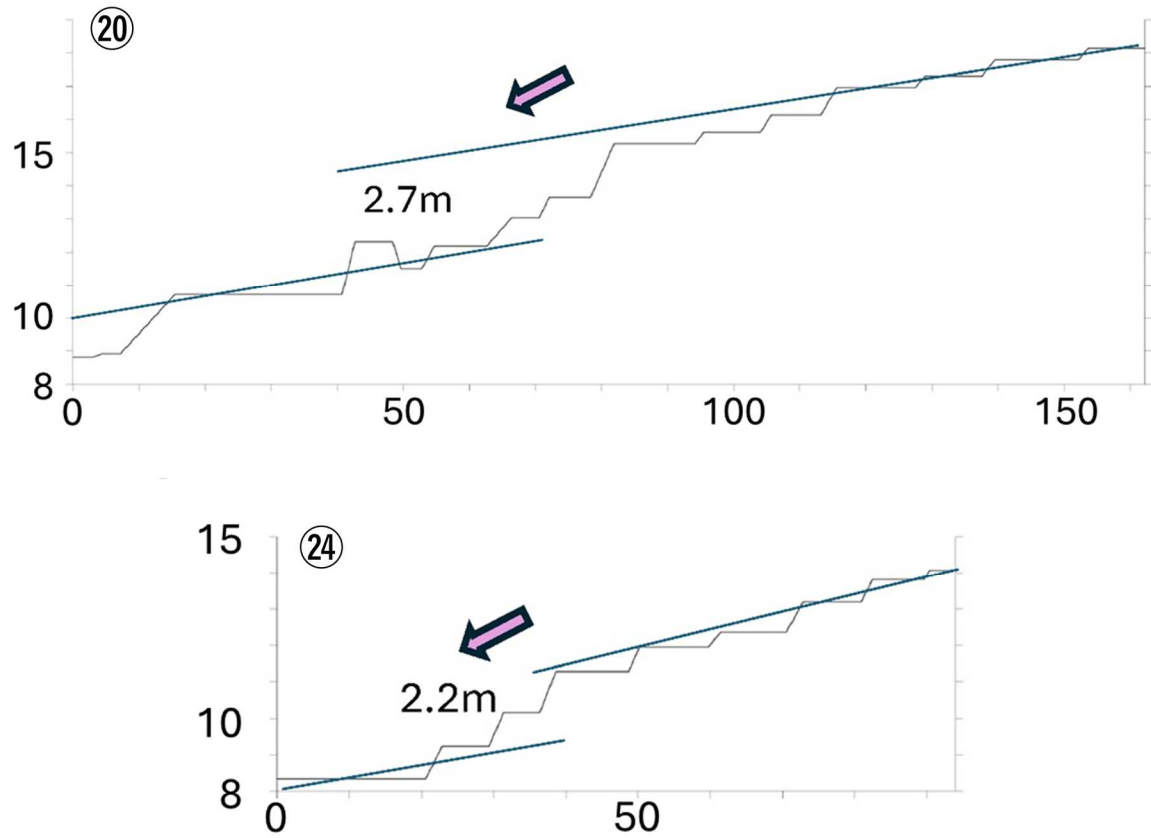


図 12 志賀町福浦港付近から赤住に至る断層（写真 9）に沿う地形断面図③（鈴木未公表資料から抜粋）

縦軸：標高(m)，横軸：水平距離(m)，垂直倍率 5 倍



写真 7 志賀町福浦港付近から赤住に至る断層の最北部海岸に見られる断層露頭（北方を望む）
（2024 年 11 月 10 日撮影）

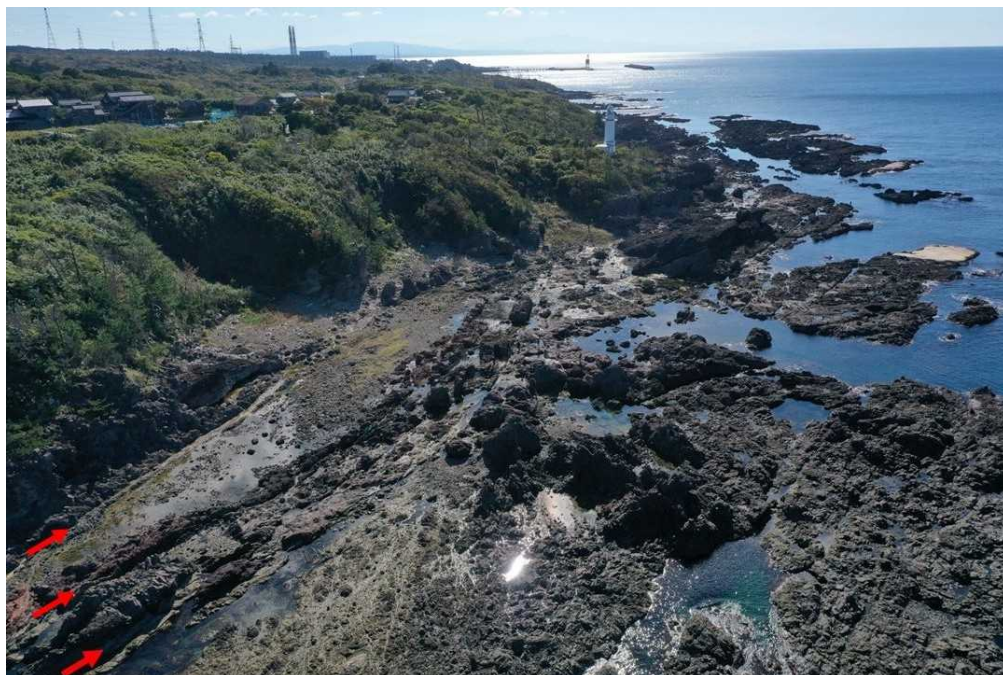


写真8 海岸に露出する志賀町福浦港付近から赤住に至る断層の複数トレース（南方を望む）
（2024年11月10日撮影）



写真9 志賀町福浦港付近から赤住に至る断層南部のトレース（北方を望む）
（2024年11月10日撮影）

1 5. ^{やない}谷内西方の断層

- ・走向 : 北北西－南南東
- ・長さ : 約4 km

- ・断層種別 : 推定活断層

(1) 概要

谷内西方の断層は、志賀町^{ししず}鹿頭付近から同町^{かのう}香能付近まで、北北西－南南東に延びる長さ約 4 km の推定活断層である。

(2) 判読根拠

2 条の明瞭なりニアメントを境に上位段丘面に高度差があるが、新しい地形面における変位が確認されないため、本図では推定活断層として表記する。

1 6. 高爪山^{たかつめやま}西方の断層

- ・走向 : 北北西－南南東
- ・長さ : 約 2 km
- ・断層種別 : 推定活断層

(1) 概要

高爪山西方の断層は、輪島市^{もんぜんまち}門前町大釜^{おおがま}付近から志賀町^{だいふくじ}大福寺付近まで、北北西－南南東に延びる長さ約 2 km の推定活断層である。

(2) 判読根拠

明瞭な鞍部地形が連続し、トレース上の一部に低崖が見られる。しかしながら新期の地形面に確実な変位地形を見出すことはできないので、推定活断層とした。

1 7. 輪島市門前町^{いがわだに}飯川谷^{まわたり}から馬渡に至る断層

- ・走向 : 北北東－南南西
- ・長さ : 約 2 km
- ・断層種別 : 推定活断層

(※上記の各諸元については、本図内における計測及び確認結果である)

(1) 概要

輪島市門前町飯川谷から同市門前町馬渡に至る断層は、北側に隣接する 1:25,000 活断層図「門前」(松多ほか 2025) 内の門前町飯川谷から本図内の門前町馬渡まで、北北東－南南西方向に延びる推定活断層である。本図には門前町飯川谷付近から門前町馬渡まで長さ約 2 km の区間が記載されている。

(2) 判読根拠

明瞭な鞍部地形が連続する。しかし地すべり地形と重なるため、活断層を確実に認定することは困難であり、推定活断層として表記する。

(名古屋大学教授 鈴木 康弘)

(広島大学教授 後藤 秀昭)

(岡山大学教授 松多 信尚)

(東洋大学教授 渡辺 満久)

引用文献

太田陽子・松田時彦・平川一臣 1976. 能登半島の活断層. 第四紀研究 15(3): 109-128.

活断層研究会編 1991. 『新編日本の活断層—分布図と資料—』東京大学出版会.

地震調査研究推進本部 2025. 日本海中部の海域活断層の長期評価(第一版)—近畿地域・北陸地域北方沖—. https://www.jishin.go.jp/main/chousa/25jun_cs_sea_of_japan/cs_sea_of_japan_honbun.pdf (最終閲覧日: 2025 年 11 月 20 日閲覧)

鈴木康弘・渡辺満久 2024a. 富来川南岸断層に沿う地震断層の発見. 日本地理学会災害対応ホームページ. http://disaster.ajg.or.jp/files/202401_Noto011.pdf (2025 年 11 月 20 日閲覧)

鈴木康弘・渡辺満久 2024b. 令和 6 年能登半島地震における富来川南岸断層の活動. 日本地球惑星科学連合大会講演要旨.

田辺健一 1940. 能登半島の断層地形並に海底地形(1), (2). 地理学評論 16: 477-490, 546-553.

日本活断層学会 2024. 日本活断層学会活断層命名の指針. <https://jsaf.info/pdf/provision/naming-guideline20240526.pdf> (2025 年 11 月 20 日閲覧)

北陸電力株式会社 2021. 資料 2 志賀原子力発電所 2 号炉敷地周辺の地質・地質構造について 敷地近傍の断層の評価. 第 973 回原子力発電所の新規制基準適合性に係る審査会合. https://www2.nra.go.jp/disclosure/committee/yuushikisya/tekigousei/power_plants/200000354.html (2025 年 11 月 20 日閲覧)

松多信尚・鈴木康弘・後藤秀昭・渡辺満久 2025. 『1:25,000 活断層図「門前」』国土地理院.

吉見雅行・丸山 正 2024. 2024 年能登半島地震の緊急調査報告 第九報(陸域に出現した地表変状の現地調査). 産業技術研究所地質調査総合センターホームページ. <https://www.gsj.jp/hazards/earthquake/noto2024/noto2024-09.html> (2025 年 11 月 20 日閲覧)

渡辺満久・中村優太・鈴木康弘 2015. 能登半島西岸変動地形と地震性隆起. 地理学評論 88A(3): 235-250.

調査に使用した諸資料及び検討委員会等

1) 使用した空中写真

撮影計画機関（種別）	撮影縮尺	地区番号又はコース番号
米軍（モノクロ）	およそ 1/40,000	M631, M930
国土地理院（モノクロ）	1/20,000	MCB639X, MCB676X, MCB683X
国土地理院（カラー）	1/10,000	CCB7518

2) 使用した航空レーザ測量データ

測量計画機関	計測年度	業務名
国土地理院	2010	航空レーザ測量による精密基盤標高データ整備業務（北陸地区）
北陸地方整備局	2009	北陸地方整備局管内沿岸域航空レーザ測量業務
石川県農林水産部	2020	令和2年度森林情報整備業務
国土地理院	2024	能登半島地震に係る航空レーザ測量業務（能登北部地区）
国土地理院	2024	能登半島地震に係る航空レーザ測量業務（能登中部地区）

本図面の全範囲について、航空レーザ測量データを使用した。

3) 地形分類に使用した資料

地形分類については、下記資料のほか、国土庁や各都道府県で実施した土地分類基本調査の地形分類図および表層地質図、防災科学技術研究所の「1:50,000 地すべり地形分布図」等を参考にして、空中写真および数値標高モデル（DEM）を用いて国土地理院が作成した。

- ・太田陽子・平川一臣 1979. 能登半島の海成段丘とその変形. 地理学評論 52(4): 169-189.
- ・太田陽子・国土地理院地理調査部 1997. 『1:100,000 地殻変動土地条件図「能登半島」』 国土地理院.
- ・小池一之・町田 洋編 2001. 『日本の海成段丘アトラス』東京大学出版会.
- ・渡辺満久・中村優太・鈴木康弘 2015. 能登半島南西岸変動地形と地震性隆起. 地理学評論 88A(3): 235-250.

4) 全国活断層帯情報整備検討委員会

a. 委員会等の開催

令和6年度第1回委員会

令和6年6月12日(水)

オンライン会議

令和6年度第2回委員会	令和6年12月23日(月) 国土地理院関東地方測量部
令和7年度第1回委員会	令和7年8月12日(火) オンライン会議
第1回活断層図作成部会	令和6年9月6日(金) 国土地理院関東地方測量部
第2回活断層図作成部会	令和6年11月11日(月) 国土地理院関東地方測量部
第3回活断層図作成部会	令和7年7月19日(土) 国土地理院関東地方測量部

b. 能登半島北部の活断層「富来」の調査担当者（令和6-7年度）

図名	氏名	所属
富来	○ 鈴木 康弘	名古屋大学教授
	後藤 秀昭	広島大学教授
	松多 信尚	岡山大学教授
	渡辺 満久	東洋大学教授

○印は、全体のとりまとめを担当した委員，その他の委員は五十音順。

5) 連絡先

国土地理院応用地理部地理情報処理課
〒305-0811 茨城県つくば市北郷1番
電話：029（864）1111（代表）

6) 引用する場合の記載例

a. 図を引用する場合

鈴木康弘・後藤秀昭・松多信尚・渡辺満久（2025）：1:25,000 活断層図「富来」．国土地理院．

b. 解説書を引用する場合

鈴木康弘・後藤秀昭・松多信尚・渡辺満久（2025）：1:25,000 活断層図 能登半島北部の活断層「富来」解説書．国土地理院，30p．

【付図（断層索引図）】

